

来たれ！楽しく・安全なラグビー部へ

去る1月23日から開催された全国高校体育連盟研究大会で、高校生が部活動を選ぶ基準についての調査発表が新聞紙上に出ていました。高校生が部活動を選ぶ基準は、楽しく安全であることで、ガチンコ部活は嫌われるという記事の中で、ラグビーが不人気の上位にあげられていました。ラグビー、柔道など身体をぶつけあう激しい競技は敬遠されるというのです。

高校生の運動部選択傾向を具体的に検討し、PRすべきところを積極的に提示し実証することがラグビー普及発展にとって今日的課題であると思います。

その1 楽しさという点でラグビーは素晴らしい競技です。

両手両足は勿論、ボールを持って走ってよく蹴ってもよく、自由奔放に動き回れる競技です。ボールの前に居ない限り、状況を判断し、一人で時には味方と組んでいるいろいろな挑戦をし、プレーの継続とスピードによって相手を負かす面白さと忘れられない思い出となります。身体のぶつかり合いも、生身の人間同士ですから、忘れて戦ってしまうくらいのもので、広い競技場ですから精一杯走り回り、玉子型のボールがどちらに転ぶか分からないことに象徴されるように、変化に富み、閃きを駆使して創造性を発揮できる、快感と感動一杯の競技です。

その2 安全なスポーツです。

日常生活で歩いていても、自転車に乗っていても怪我はします。身体を動かさずぶつかり合いますから、少々の痛みとすり傷位は全くないとはいえません。安全なスポーツとは、普通にしていたら大きな事故がないという定義のもとでは、安全なスポーツの一つです。ルールを正しく守り普通にしていたら安全であるということです。ルール違反や無謀なことをしなければ、楽しく安全です。

その3 友達づくりという点では最高のスポーツです。

15人という多人数です。組織的に戦うことによって大きな効果を発揮できます。

協力の楽しさと必要性を学び、友達と一つの目的にむかって努力した快感と達成感を味わえ、その思い出と感動は最高のもので、生涯続く友情を培うことができます。

今日的課題の素因を考え、解決の方策を考察しましょう。

結論としてラグビーは最高のスポーツです。それでは何故敬遠されるのでしょうか。

理由の一つとして、ここ10年来の社会の急激な変化があげられます。政治経済の変化もさることながら、直接的には、小児化による家庭養育から遊びの変化、孤立化・室内化の現象があります。また、総体的に子供数の減少に加えて、スポーツの多様化によるスポーツ人口の分散と、一般的な価値観の多様化は、動きの激しい多人数競技に影響を与えざるを得ない環境です。この傾向は日本に限ったことでありません。10数年前に英国でも憂うべき傾向を察知し、RFUも「recruit or die」という強烈な題の小冊子を出して、初心者への獲得に努力しました。日本でもラグビー協会がいろいろと対策を練り実施しているところですが、ラグビー界全体として、普及発展の根幹になる、楽しい安全なラグビー指導普及の努力が十分になされているとは残念ながら言えません。格闘技としての激しさだけをラグビーの良さだと思い込んでしまっている傾向があります。

楽しい安全なラグビーは、言葉にすればright(正しくフェア)、bright(賢く明るい)、interesting(興味深い)という3つの言葉に要約できます。楽しいということは、プレーの激しさや、戦闘意欲を損なうものではありません。楽しい安全なラグビーは弱いラグビーではありません。それは試合に勝つ合理的方法でもあるのです。そんな面白いラグビーを実際に展開して、世界に勝つのが国代表チーム結成の本来の目的で、普及に絶大な効果があるのです。

ラグビーは危険なスポーツではありません。楽しいという本来的なものに加えて、安全にも十分配慮されていますので、お互いにルールを正しく守ることによって楽しく安全な試合をすることができるということに間違いはありません。敢えて言えば、「正しく」守る、即ちルールの意思(制定の意図)を具現しようとする意識(姿勢)の問題です。

その点で試合の現実には到底安心できない状態です。例えば第15条を正しく守れば、プレーが展開継続し、もっと楽しく安全になります。規則は平等公平、展開継続、事故防止を3本の柱として構成されているのです。試合に勝つことは大切ですが、勝利至上主義に走ってしまえばルールが志向しているラグビーの良さが実現されていないと言わざるを得ません。全国大会も日本一を決めるだけのものであっては惜しいと思います。花園ラグビー場は高校生たちに、ラグビーの良さを学ばせ、ラグビーの面白さを再発見させて、すばらしいラグビーの夢を与える聖

地であってほしいものです。60分をペナルティ1つで戦った記録は何より素晴らしい教材です。
楽しく安全なラグビーに焦点を合わせた地道な努力が最も大切なのです。

2003.03.01
西川 義行